

## 2-04 摂食拒否のある児の食具操作獲得をめざして —小脳性失調を呈した児の一例—

○中川 優希(OT)

大阪発達総合療育センター

Key word：小脳性失調，摂食機能障害，食事

**【はじめに】**今回，食具操作獲得を目標に8週間入院した摂食拒否のある失調型脳性麻痺児を担当した。スプーン操作とフォークで刺して口に運ぶ動作が自立し，一定量摂取できるようになった。本報告はご家族の同意を得ている。

**【症例紹介】**6歳男児。在胎23週628gで出生。診断は肝芽腫，小脳萎縮，失調型脳性麻痺，摂食障害。幼少期に頻回の嘔吐や経管栄養があった。GMFCS，MACS，CFCS 全てレベルⅢ。几帳面でこだわりが強い。母親のニーズは就学に向けた食具操作獲得だが，家では摂取量確保のため全介助だった。介助で食物を口まで運ぶと体を伏せたり口を塞いで拒否するため，エンシュアで栄養摂取を補っていた。好きな唐揚げなら食べる口腔機能はあった。入院中，食事が摂れなければ退院も考慮された。

**【評価・治療目的・方針】**体幹筋は低緊張で空間リーチで全身が動揺したが，演者が児の肘に手を添えると軽減した。介助すればスプーンは握るが把持力，持続性が乏しく，動揺もあり食塊がスプーンから落ちた。治療目的は支持基底面を保障した上で①体幹の安定を図り上肢活動の成功体験を積むこと②手内筋の活性化とし，60分/回の治療を週5回実施した。方針は，食事以外の場面で児と信頼関係を築き，無理のない範囲で食事に取り組むこととした。

### 【経過】

#### 第1期：手内筋の活性化を促した時期(1週間)

児の両肘を机に接地させて遊んだ。一側上肢を支持して対側が動かしやすくなると姿勢も安定した。粘土こねなど抵抗感を利用して手内筋を賦活した。上肢の固有覚フィードバック強化を目的にゴムバンドを机と手首に巻き，遊びの中でスプーン操作を行うと動揺が軽減した。食事では，必ず手を添えて失敗を避けた。次第に演者の介助をゴムバンドに置き換えても自ら取り組めた。

#### 第2期：食具操作の機能と意欲が向上した時期(3週間)

スプーンは演者の手添えやゴムバンドがなくても皿に沿わせてすくい，量の微調整もできるようになった。足底や坐骨での支持や肘の接地を促すと上肢の揺れは軽減し，空間でスプーンを保持できた。口の手前で揺れが増大したが，何とかスプーンで取り込めた。成功時の賞賛を徹底すると何度も挑戦し，笑顔をみせた。フォークは十分に刺しこめず，食物は落ち，食事の中断が増えた。遊びの中でフォークを下向きに持たせると平らな形状のものは刺しこめ，一人で楽しんで人形に食べさせた。

#### 第3期：フォーク操作の質向上に向けて介入した時期(2週間)

下向きのフォークで刺しこめたが，就学を考慮し上向きで練習した。机からフォークを持ち上げることが難しかったため，握りやすい太さかつ母指と示指が対立位になる柄に形状を工夫した。次第に自らフォークを持ち，刺しこみから口に運ぶまでの動作が連続できるようになった。食具操作に集中し，注意が逸れることが減った。上手く刺せない時は違うおかずを刺すなど粘り強く取り組んだ。食塊が口からはみ出たときはフォークを使って口に入れた。

**【結果】**母への聴取による食具操作のCOPMは，遂行度は3→7，満足度は3→8に向上した。手づかみ食べがなくなり，自ら食具で食べる習慣がついた。

**【考察】**本児は幼少期の嘔吐や経管栄養に加え，咀嚼嚥下に時間を要した。また，小脳に起因する失調症状を有し，食具操作の成功体験が得にくく，食への意欲を失っていたと考えた。意欲を高めるためには口腔機能のみならず，遊びや食具を扱う過程で達成感と意欲を回復させる必要があった。今回，自発動作を成功させること，支持基底面を安定させることに配慮した治療を行ったことで，比較的短時間で食欲，食具操作ともに成果を得た。